

2007年 8月15日発行（隔月刊）



う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2007年8月
第 63号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久



目 次

漢点字の散歩（2）（岡田健嗣）	1
点字から識字までの距離（59）（山内 薫）	5
一 言（岡田健嗣）	10
酔夢亭読書日記（第22回）（酔夢亭）	11
見果てぬ夢を（6）（山本優子）	13
21世紀東アジアを中心とした漢字文化（村田忠禧）	15
「東京漢点字羽化の会」第19、20回例会報告並びに 第3、4回「学習会報告」とわたくしごと（木村多恵子）	19
ご報告とご案内	24
漢文のページ	25
漢点字講習用テキスト（初級編・第4回）	30

漢点字の散歩 (二)

岡田 健嗣



二 点字には二つの漢字がある？

〈漢点字〉を川上先生が発表されたのが一九六九年、私が〈漢点字〉に出会ったのが一九七八年、その間の九年、私は〈漢点字〉を知る機会を得られなかった。正確に言えば、〈漢点字〉に関する風聞は耳にしていたが、東京近辺では、正確な情報が得られなかった。情報を積極的に収集する公的機関がなかったからだ。

私がどのようにして〈漢点字〉の情報を得たかといえば、ある点字雑誌に載った、通信教育による「漢点字学習」の募集記事を偶然読んだことにある。そこには、川上先生が当時勤務しておられた大阪府立盲学校へ応募すれば、直ぐにも受講できるとあった。

私は一九七〇年に横浜市立盲学校を卒業して社会へ出たのだが、盲学校では漢字の教育を受けていなかった。盲学校在学中は、視覚障害のある先生方と幼少時

からの生徒は、全て漢字の教育を受けていなかった。そのためか盲学校にいる限り、漢字を知らなくともほとんど差し支えなく過ごした。世の中で〈漢字〉が、どれほど大事なものか知らされなかったからである。

社会へ出て、〈漢字〉を知らないことは〈言葉〉を使えないことだということ、また世の中は〈言葉〉によつて動いているということ、痛切に知らされた。残念ながら〈漢点字〉には中々出会えなかったが、幸いにして社会人九年目にして勉強する機会に会えた。母語である日本語の実際に触れることができ、初めて自分の〈言葉〉を持ったという実感を得たのである。

「六点漢字」

八〇年代に入ると、視覚障害者の間に〈漢字〉へのニーズが大きく広がった。〈漢点字〉を学習する機会が開かれたことが、潜在していた〈漢字〉学習のニーズを、表に呼び起こしたものである。また私は、私がお味わっていた自分であつて自分でない、自らの〈言葉〉を自らが発せられないような喪失感、そんなものを多くの視覚障害者が共有しているのだろう、そう捉

えていた。〈漢点字〉には多くのニーズが寄せられ、川上先生は寝る間も惜しんで通信教育に対応しておられたという。

点字の出版メディアも競って〈漢字〉に関係する書籍を刊行したり、講座を設けたり、そんなニーズに応えようとしていたが、〈漢点字〉を引き受けようとする動きは見られなかった。現在もまだ現れない。

そんな中、あたかも〈漢点字〉に対抗するかのよう
に、「六点漢字」と呼ばれる点字符号が現れた。

「六点漢字」とは、元教育大付属盲学校教諭の長谷川貞夫氏が考案された点字符号で、〈漢点字〉から五年ほど遅れて発表された。長谷川氏は、視覚障害者が普通の文字（墨字）を独力で書くためにはどうすればよいかという課題に取り組まれて、まだ黎明期であったパーソナル・コンピュータに逸速く注目なされた。まだ現在のように、ローマ字入力やカナ入力から漢字に変換する方式は日の目を見えおらず、一般にもコンピュータで漢字を処理するのは困難とされていた。

一九七八年に初めて漢字のJIS規格が制定されて、我が国のコンピュータで扱われる文字がコード化された。長谷川氏はこのコードを、ローマ字やカナか

らの変換ではなく、一文字一文字を直接変換する方法を編み出したのである。これが現在言われている「六点漢字」である。

「六点漢字」の考え方は、キーボード上の f・d・s と j・k・l の六つのキーを、あたかも点字タイプライターのように見做すことで、点字タイプライターで点字を打つ要領でキー入力すると、普通の文字に変換される。コンピュータがそのように処理する。つまり、文字変換処理のソフトウェアのための入
力に点字符号を応用したものである。

本誌の一般の読者の皆様には理解し難いことかもしれないが、点字タイプライターの入力は、六つのキーを、点字の組み立てに従って、その幾つかを同時に押す。「め」なら六つ全部を、「あ」なら一つだけをと
いうようにである。元来コンピュータのキーボードの設計には、複数のキーを同時に押すことは想定されていない。しかしソフトウェアで f を一の点、j を四の点として同時に押した場合を仮定してみると、点字タイプライターと同様のキー入力が可能であることが分
かったのである。つまり f だけを押し、「あ」を、 f
・ d ・ s ・ j ・ k ・ l を同時に押し、「め」を出力す

ることができたのである。長谷川氏はこのキー入力方式を「点字入力」と呼んだ。

当時の一般の点字はカナしかなかったもので、長谷川氏は漢字をどのように入力するか苦心された。そこで着目したのが、漢字の「音読み」と「訓読み」である。音の頭の一文字と、訓の頭の一文字をカナ点字入力する、たとえば「岡」であれば「こ」と「お」を入力することで「岡」という文字に変換されるよう、ソフトウェアを組み立てて行ったのである。このようにしてでき上がったソフトウェアを、「点字ワープロ」と呼んだ。

この長谷川氏の考え方は、「六点漢字」ばかりに当てはまるものではなかった。少し遅れはしたが、〈漢点字〉の点字符号を応用したソフトウェアが開発されて、私も初めて独力でプリンターに墨字を出力できた。この時の感激は、〈漢点字〉を学習して漢字の世界を知った時に劣らないものであったことを覚えている。パソコンの助けがあれば、墨字を書くことができ、人の助けを得なくとも、取りあえず文字が書けた、このことはそれまでになかったことである。

点字の漢字は二つ？

ところが何時の間にか「点字の漢字」とは、パソコンで入力する点字符号という認識が、視覚障害者とその周辺（点字図書館や盲学校関係者）の晴眼者の間に常識となっていた。

川上先生はこのような推移を大変心配されたが、残念ながらその流れを押しとどめることはできなかった。「点字方式の入力符号」↓「漢字入力の方式」↓「二つの点字の漢字体系」という認識は、級数的に一般化して行った。

私は当時、「六点漢字」と呼ばれる点字符号を「漢字の体系」と理解して、その学習を試みた。テキストを取り寄せて勉強してみた。だが、全く力が入らない。どうしてか？ 考えてはみたものの、これは「読む」ものではないと結論付けるに至ってしまった。テキストとともに長谷川氏直々の解説が録音されたカセットテープが届いたが、そこにも「読む」ことについて、ほとんど触れられていなかった。

私はその学習を断念した。

私は八〇年代、九〇年代、そして二〇〇〇年に入つて、「二つの点字の漢字」を、漢点字使用者と他の視

覚障害者、そしてその周辺の関係者がどのように扱おうとしているかを、つぶさに観察することにした。とりわけ「六点漢字」の推奨者が、それをどのように「読書」に結びつけるか、時間をかけてじっくり観察したのである。点字書籍の出版社である「桜雲会」では、「六点漢字」を使った書物の出版を試みていたし、ニューブレイルという団体では、「六点漢字」を使った雑誌を発行したりもしたが、極めて短期間に終刊してしまった。このような観察は、私の「六点漢字」は「読む」ためのものではないという認識を裏付けた形となったのである。

川上先生は〈漢点字〉を、触読文字の「漢字体系」と位置づけて私たちに教えて下さった。「読む」とは文字を「読む」ことであり、文を「読む」ことであり、著者の言わんとするところを「読む」ことである。してみるとそれに耐え得る体系が求められる。〈漢点字〉は川上先生の発表以来、試され続けて来た。そして答えて来た。

結び、「二つの点字の漢字」

とは虚偽である。

現在行われているローマ字やカナをキー入力して漢

字変換する方式も、文字に変換されるまでは、単に読みの音に従って入力しているのであって、変換されて初めて文字となるのである。パソコンで文を書いている人が、ローマ字をキー入力することを文字を書くとは言わないように、「点字入力」と呼ばれる「六点漢字」の inputs も、文字を直接入力しているのではない。

「二つの点字の漢字」の並立という認識も、既に二十数年を経ている。川上先生は当初から「六点漢字」は「点字の漢字体系」ではないと言われていた。私も自らの体験から、そう考えて来た。

しかしどうしてこのような認識が現在に至るまで私たちを縛り続けるのか、私にはその当初から不審でならない。「パソコンの入力用の符号」という位置付け、そろそろこの呪縛を解く時期に来ているのではないか、私はそう考えてみたい。

パソコンへの inputs は、一般に行われているローマ字変換をスタンダードとして、〈漢点字〉は読むもの、触読用の文字という位置付けを、そろそろ漢点字使用者の間に確認してはどうか、私はそう考えるのである。

手前味噌になるが、本会の活動は当初から〈漢点字〉を触読用の文字、触読の方法として捉えて来た。

これまでに漢和辞典である『漢字源』を完成し、現在では『常用字解』の製作を目指している。『常用字解』ではできうる限り字式を織り込んで、視覚障害者にも〈漢字〉を形の面から理解できるように工夫している。これが完成すれば、〈漢点字〉が如何に〈漢字〉を点字符号に実現しているかが、一目されるはずである。

現在点字の周辺では、〈漢点字〉は〈漢字〉ではない、「代替文字」だとする主張が強く出されている。点字を守り推進しなければならぬはずの盲学校、点字図書館を中心に、このような主張がある。

しかし〈漢点字〉をこのように規定して、従来の点字はそのまま「視覚障害者の文字」だとしているのだが、それならばいったい「点字は文字か？」という議論も出て来るはずである。これは正に、ルイ・ブライヤの〈点字〉の創案に逆戻りするものではないだろうか？

*本稿は、川上先生の〈漢点字〉創案を跡付けて、視覚障害者が〈漢点字〉を学ぶことが〈漢字〉を学ぶことだということを裏付けたいと考える。川上先生のご苦心・ご工夫に敬意を払いたい。

点字から識字までの距離(五九)

みどり学級へのサーブス(八)

みどり学級での公開授業(四)

山内 薫(墨田区立あずま図書館)

さて、いよいよ公開授業の当日、学校には全国から大勢の先生方が見学に来ていた。午後一時過ぎに学校に行くと言付名簿に大阪府枚方市などと書かれていたので、かなり遠くから公開授業を見に来た先生もいたようだ。校舎の正面玄関を入ってすぐ右側にあるみどり学級の入り口には、今回の公開授業の案内が二枚のパネルを使って大きく掲示されていた。パネルの上には「緑図書館 月に一度の読み語りを子供たちは楽しみにしています。」と大きく書かれ、その下に三人の緑図書館職員の写真が貼ってあり、それぞれ「何でもやさんの山内さん！ピアノ・工作・演劇となんでもこなしちゃいます。」「アイデアいっぱい！工作名人金子さん！」「歌も教えてくれる 竹内さん！」と紹介されていた。下段には、私の作った『かいじゅうたちのいるところ』のジグソーパズルが飾られ、本の表紙



写真1 教室入り口のパネル

とパズルに興じる子供たちの写真が三枚貼ってあり、写真から吹き出しで「子どもが大すきな『かいじゅうたちのいるところ』を手作りのパズルにしてくれました。」「みんな夢中！」と貼り出されていた。一番下には「みんなのイチオシ本」と書かれ、S君は『じごくのそうべえ』（田島征彦 作・絵、童心社）、Oさんは『コッケモーター』（ジュリエット・ダラスII コンテ作 アリソン・バートレット絵 たなかあきこ訳 徳間書店）、Tさんは『リスクラブーシマリスの飼い方』（大野瑞絵著 森脇章彦写真 誠文堂新光



写真2 パズルを選ぶ

がパズルに挑戦した。子どもたちは既に何度かやっているの、みんな十数分で完成したが、S君はなかなかうまくできずに絵本の該当ページを先生が開いて手貸すことで何とか時間内に完成したのだった。さていよいよ

社）と三人の子どものイチオシ本の表紙が飾られていた。公開授業は午後一時四五分から二時三〇分までの四十分間だが、その前に一五分間のブックタイムという時間があり、他のクラスでは保護者などの読み語りが行われたようだったが、みどり学級では、その時間がパズルの時間として設定されていた。黒板の前に並べられた『かいじゅうたちのいるところ』の十種類のパズルの中から自分のやりたいものを選んで、それぞれ



写真3 パズルはむずかしい

『かいじゅうたちのいるところ』を竹内が、次に『つきよのかいじゅう』を山内が、そして最後に『くいしんぼうのあおむしくん』を金子が順に読んでいった。その後メインの劇あそびの前にD先生がみんなの科白と太鼓などを使った足音の確認を行った。それから、それぞれの子どもが作ったやぎの帽子（最初の予定ではお面だったが、最終的には帽子になった）をかぶり、がらがらどんの歌を唄って劇が始まった。本番では八広図書館で作成した、毛糸でできたトルルの着ぐるみ

授業が始まり、まず、私たち緑図書館の職員四人が改めて紹介された。その後D先生が今日一日の予定を子どもたちに説明、前半は怪物の出てくる本の読み語りで、最初はパズルでやった



写真4 トルルの着ぐるみを着た先生

るみをT先生が着て本当にトルルらしくなった。私は歌のピアノの伴奏の他に小さいやぎのがらがらどんの音（ウッド・ブロック）、中くらいやぎのがらがらどんの音（小太鼓）、大きいやぎのがらがらどんの音（大太鼓）も担当した。トルルをみんなで退治した後でもう一度がらがらどんの歌を唄い無事に劇あそびは終了した。ヤギの帽子をかぶったりトルルの着ぐるみを着たりと練習の時よりも随分劇は盛り上がりを見せたのだった。



写真5 中くらいのヤギがはしをわたりにやってきました

れぞれの役をやっていた子どもに語りかけるように話し、せりふの所では役をやった子どもの前に絵本を持って行ってせりふを確認しながら読み進んでいった。その語り口と子どもたちの楽しそうな表情を見て、本当に今回の公開授業が成功裡に展開し、生徒や先生との絆がさらに深くなったことを実感した。そして大きいやぎのながらがらどんの場面になると子どもたちが読

その後ま
だ少し時間
があったの
で、トロール
役をやった
いたT先生
が『三びき
のやぎのが
らがらど
ん』を大き
な積み木に
腰掛けて読
み始めた。
T先生はそ



写真6 最後にもう一度絵本を読む

に着き「ちよきん、ばちん、すとん」で読み語りは終わったが、子どもたちの顔は皆満足げだった。劇遊びを通して一冊の絵本でこれだけ盛り上がることで、本当にすばらしい授業になったと実感した。最後に図書館の職員が作った針金と毛糸で作った三びきのやぎのながらがらどんの小さな人形をプレゼントして公開授業は終了した。

んでいる
T先生に
詰め寄っ
て押し倒
し、さつ
きやった
劇を再現
して、し
ばしもみ
合いとな
ったのだ
った。再
び子ども
たちが席

今回の公開授業がうまくいったのは、やはりみどり学級との三年間に及ぶ交流があったからだと痛感している。『つきよのかいじゅう』の好きなS君も三年生の四月にみどり学級に転入してきた当初はイスに座ることはおろかクラス内に居ることも稀で、T先生と一緒に校庭を歩き回っていた。その後やっと机に座れるようにはなったが、初めはお話には全く興味を示さず、分厚い『イミダス』の開いたページの一部分を指でなぞりながら一人で読んでいたのだった。紙芝居などに興味を持ち始めたのは、ほぼ半年を過ぎてからだったが、一つの転機は翌年三月と一緒に歌った歌「ふしぎなポケット」ではなかったかと思っている。ある時宅配の帰りに京葉道路の歩道でごねているS君に出会ったことがあった。丁度その時は授業が終わりヘルパーの方と学童保育クラブのある近くの児童館まで行くところだったのだが、行きたくないと道路に座り込んでいたのだった。見るに見かねて一緒に児童館に行こうということになったのだが、普通に歩けば十分くらいで着ける児童館まで、およそ四十分かけて一緒に歩いて行った。その道々一緒に「ふしぎなポケット

ト」を歌いながら歩いたのだった。それこそ三十回は歌ったと思うが、何かしらそうした小さなきっかけから、とてもよいコミュニケーションが取れることがある。みどり学級のように心身障害学級といっても一人一人が全く違った障害（というよりも、こだわりがあったり、コミュニケーションが取りにくかったりという苦手な部分）があり、それぞれが抱えている課題も個々に全く違っているもので、できれば一人の子どもに一人の担当教員が常に付いている状態が作り出せないものかといつも感じさせられる。文部科学省が標榜している特別支援教育も何よりもきめの細かさが求められるだろう。そのS君も今年の三月には緑小学校を卒業して近くの中学のやはり特別支援学級に入学した。同じ四月に私もあずま図書館に異動になってしまったので、みどり学級には行けなくなってしまったが、あずま図書館の近くの小学校の特別支援学級に声をかけて是非同じようなサービスを続けて行けたらと思っています。

岡田健嗣

週刊点字新聞・点字毎日の読者欄に、気になる投稿があった。少し引用してみる。

「4月からガイドヘルパーの制度が変わり、必要に応じて、各事業所と個人が契約することになった。わたしは最も規模の大きく、いろいろな施設を経営している事業所へ相談したところ要領を得ないので、直接市の福祉課へ連絡した。

相手は大変横柄で、弱い者に与えるといった態度が見え見えだった。わたしに許された時間は1か月15時間ということであったのに、市役所からは10時間という通知が事業所にきていた。後5時間は私に権利があると粘ると、何に使うのかと使用目的を聞いてきた。『パソコンの勉強に10時間、残りは教会』と答えると、どこの教会かと尋ねる。余計なお世話だと言いたいのを我慢して、教会の名前を言った。

事業所も、わたしはお願いしているのに、『気に入らなかつたら他へ行って下さい』と、随分高飛車な態度に驚いて途方に暮れた。(以下略)「(読者の広場『美しい日本の貧しい福祉』(静岡県・鈴木みどり

氏)「点字毎日・二〇〇七/〇七/〇一」(本文はカ
ナ点字。漢字仮名交じり並びに読点は引用者。)

この他にも、一昨年に成立して順次施行されている障害者自立支援法の実施状況が知られる投稿が幾つかあった。

右の投稿にある視覚障害者のガイドヘルプ事業は、地域によってその実施状況に大きな開きがある。静岡では一か月一五時間利用できるという。しかも自由に利用できるのではなく、行く先や要件など細かいチェックがあるという。

他の地域では、事業所そのものがなく、サービスそのものが提供されないとこもある。

点字毎の投稿者の鈴木さんは、「『国が決めることだから仕方がないよね』というつぶやく声を聞き、(中略)卑屈に哀れみを受けるのではなく、権利は堂々と守り、与えられた事柄には感謝する姿勢が欲しい。」(同前)と結んでおられる。

社会福祉ばかりでなく医療の面にも弱者に厳しい対応が目立っている。

免疫学者の多田富雄先生は、ご自身の脳梗塞の後遺症に対するリハビリテーション医療が、一昨年の制度改正に伴って停止されたことを例に、一九六〇年代以



酔夢亭読書日記(第22回)

酔夢亭



某月某日。

仕事が混んでくると、どういいうわけか同じ時間帯に二つも三つも重なってしまふことがある。ダブルブックングどころではない。それをやりくりして、微妙に時間をずらしたり分身の術などを使ってなんとかこなしているのが忙しい現代人かと思われる。

ところでそんなてんでこ舞いのときに限って、出がけに電話がかかってきたり、身内の者が体調不良を訴えたりする。それをなんとかうちやっつけて、なだめすかして駅に着いてみると人身事故で電車が止まったり…。そんな経験ありません？

こういう状況に陥ることを「踏んだり蹴つたりの法則」とわたしは秘かに名付けている。

悪いことは重なる、一難去ってまた一難、ハンダ付けをしていてハンダ鏝が床に落ちそうになったのであわててつかんでやけどした挙句、あまりの熱さに床に落ちて高価な絨毯を焦がしてしまったりとか、何をやってるんだかわけが分からないことがある。

先日も補助金の申請書や役所に届ける書類を作成し

来推進されて来た厚労省(旧厚生省)のリハビリテーション医療が、大きな転換期を迎えているという警鐘を鳴らしておられる。脳血管障害や外傷などの受傷後のリハビリテーションの質が、その後の人生の質を決めるということは、厚労省が主張し続けて来たことである。ところが今回の医療制度改正では、一定期間(ごく短期間)を過ぎた患者のリハビリテーションは、治療としての効果が期待できないとの理由で、打ち切られることになったという。(多田富雄「厚労省リハビリ利権は醜い」文藝春秋・二〇〇七/〇七)

来年度予算でも、社会保障費の大幅削減は至上命題とのことで、社会福祉を担う厚労省はその口にする理念に反して、予算を伴う実施情況の拙劣さとのギャップに目をつむって、見えないものはないものという姿勢を採っているように見える。

七月二九日に実施された参議院議員選挙で、自民党が大敗し民主党が一人勝ちしたが、その根がどこにあるかが分かるように思われる。選挙での自民党大敗の一つの理由と言われる「格差社会」への不審は、単に所得格差ばかりでなく、地域格差、意識格差まで視野を広げることがなければ、福祉社会は成立しないことを意味しているように思われてならない。

ていると突然、パソコンの電源がくしゅんと切れてしまった。オイオイ冗談はよしてくれよ、忙しいんだから。しかし、我がパソコンはスウィッチを押そうが叩こうがもう、うんともすんとも反応しない。画面がフリーズしたのどうのというレベルの問題ではない。電気が流れないのである。

電気が流れないパソコンなんてタダの箱であり、わたしはおおいいにあわてた。とにかく電源コードを抜き、パソコンの箱に繋がっているケーブルをはずし、机の下から乱雑を極めた机の上とにかくひきずりだした。最初にわたしは電源部のあたりの匂いを嗅いでみた。怪しいものは匂いで分かるというではないか。

そう、確かになにか焦げ臭い。焦げ臭いということはどこかでショートして何かが燃えた、ということではないか、とはだれもが推理する。わたしもそう判断した。電源部分は長く使用しているとコンデンサだかなんだがイカレてしまうことがあることはなんとなく知っている。

わたしは翌日ビックカメラに出かけ、早速電源部を6千円ほどで購入してきた。パソコンを分解すると埃が凄まじかった。埃が燃えたのではないかと思えるほどである。子どものころから分解は得意である。分解は得意であるが、もとに戻すのは不得意であった、という記憶がパソコンを開けながらわたしの気持ちを落

ち込ませようとしていた。

某月某日。

とにかく毎日書きなさい、どんなひどい環境であっても書きなさい。ブライアン・フリーマントルは、通勤電車のなかで毎朝執筆したという。それ以外時間の持ち合わせがなかったからだ。

コリン・デクスターはかく言う。下らないものを山ほど書きなさい。何かを書けばなおしようもあるが、何も書かなければそもそも出発しようがない、と。

某月某日。

我がパソコンはどうか旧に復することができた。安堵と共に危機管理の必要を感じた。パソコンの中にはマザーボードという配線のメイン基盤があることなども今回の分解でなんとなく分かった。

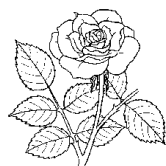
思うに、パソコンがなければどうするか。わたしはいろんな表を手書きで書こうと思ひ、実際そうしてみた。定規を使い線を引き、文字を丁寧に書いてみた。そうするとなぜか妙に落ち着いてきた。なにか手応えのようなものを感じたのはなぜだろう。

いずれにせよ、役所に対する自立支援の給付金申請も10月から電子申請になるわけで、パソコンはとにかく健全に維持しておく必要はある。

以下次号

見果てぬ夢を（六）

山本優子



七 増江（承前）

部屋に戻って包みを開くと、硯や筆や紙が出てきた。千代は感心した声で言った。

「増江どんな、まこてゆ気がつかお嬢（ごじよ）じゃっどな（増江さんは、本当によく気のつくお嬢さんね）」

孝之進は、聞いていなかったふりをした。母が風呂に行ってから、孝之進は一人水を運び、墨をすり、筆を持ってみた。今だって、字は書ける。書いたものを自分で確かめることができなくなっただけだ。今夜は自分でも驚くほどさらさらと筆が動く。つつい心の内を吐き出していた。

水の流れと人の身は 昨日に変わるあすか川
淵も瀬となる慣いあり われも昔は世の中を
月雪花とおもしろく 眺め暮せし身の上は
あわれ幸なき身となりて 世をうば玉の闇の中
春のあしたや秋の夜の 心やるせもなくばかり
憂ひの雲の絶え間なく 涙の雨に日は暮れて

行方は遠き不知火の 筑紫の空に旅ごろも…

ここまできて、孝之進の目から涙があふれてきた。

ねぐら定めぬ時鳥 血に泣く人の心地をば

訪い慰むる友もなく 憂きを語らふ妻もなし

独り仮寝の夢枕 夢に夢みる心地して

明日はいづこに迷ふらむ

ふすまが開く音がしたので、孝之進は筆を置いて、立ち上がるとした。

「コウさん、まだ休みなさらんとですか？」

増江だった。孝之進は、書いていたものを丸めようと焦った。が、増江はすばやくそれを奪い取ってしまった。

「悪くないお手。これには、あなたの想いが重なっているのですか？」

「いえ、その……」

「コウさん、いつも毅然としとんなさいますが、本当は淋しかっじやないですか」

「正直に言えば、そうです」

「わたしがおりますが（いるじやないの）」

「はあ？」

「わたし、コウさんの盲教育の夢に一緒に取り組ん

でみたいと考えるようになりました。わたしでは、いけませんか？」

孝之進は棒立ちになった。それから、心を静めながら、増江の声のする方にお辞儀をした。

突然の孝之進と増江の結婚話には、予想以上に周りの反対が押し寄せてきた。何よりも、かつて増江をもらってくれないかと持ちかけた今村虹助本人が、断固許さないという姿勢を見せた。初めは士族である左近允家に平民の増江が嫁ぐべきではないといった建て前論を語ったりした虹助だったが、増江の意思が固いのを知ると、感情的に反対しだした。

「お前などに見えない夫の世話ができるはずがなからうもん」

「盲人教育などと、そんな誰もやろうとしないことを思いつきでやっていけると思うとるのか」

増江も負けてはいなかった。

「わたしにどんなことができるか、見とってください。わたしは左近允さんと生涯共に働きます」

「誰もやろうとせんことだからこそ、誰かが始めなくてはならないはずです」

虹助はついには孝之進と一緒になるなら、勘当だと増江に迫った。孝之進は、盲人が世間並みの人生を切

り拓いてゆくことの難しさを改めて噛みしめた。

そんな中で、森山平吉は孝之進たちを励まし、増江とともに親族のいる郷里から離れることを勧めた。とりあえずは母も共に三人で、今村家の遠い親戚で増江が小さいころかわいがってくれたという一家のいる大阪に向かうことにした。四月の初旬になっていた。混んだ汽車に乗り込み、ようやくその揺れに身を任せた時、増江が小さく叫んだ。

「まあ、窓の外、菜の花畑ですよ。一面真黄色のところをおでんとさん（太陽）が照らしてまぶしいかとあります（まぶしいくらいよ）」

孝之進は昔目にしていた鮮やかな黄色がどこまでも続く菜の花畑を思い出した。言われると、今でもその景色をはつきりと想い浮かべることができるよう。増江はこのようにこれから自分の目となって目に入るものを伝え続けてくれるだろうか。孝之進は夢見る想いで揺られているうちに眠り込んでいた。

さて、大阪に着いたが、頼みにしていた一家からは、とりあえず一晩は泊めてやるが、久留米に戻ってもう一度皆と話し合うようにと諭された。久留米の今村家への遠慮があったのであろう。助けることはできないときっぱり言われた。

孝之進と増江、母千代は膝をつき合わせてため息をついた。

「どうしたものだらう。関西でやっていく道をさがるのは無理だらうか」

「そうですね。わたし、この地域のことは何も知りませんが。お義母さま、こんなところで盲人教育を始められるでしょうか」

「あととはあなたたちで決めて進むべきですよ。私はお父さんのお墓があるから、薩摩に戻ります」

千代は、言った。

その時、その家の手伝いの者が電報が来たと持ってきた。兵庫電鉄（今のJR山陽線）の工作場で鋳物技師をしていた森山文吉からだった。住居など当面の必要を助けられるから、兵庫（神戸）に出て来いというのだ。

後から考えると、なぜ決心できたのか、孝之進自身にも不思議だった。増江と母と話し合い、大いなるものの力に突き動かされるように、兵庫行きを決めた。

翌朝母は、郷里に戻ってゆき、孝之進と増江は、ほとんど着の身着のまま未知の地、兵庫に向かった。一八九九年（明治三十二年）の春、孝之進二十九歳、増江三十二歳の時だった。

（つづく）

21世紀東アジアを中心とした漢字文化

横浜国立大学教育人間科学部教授

村田 忠禧

以下は、横浜国立大学教授・村田忠禧先生のご講演の骨子です。掲載に当たつての先生のご快諾に、深く御礼申し上げます。

井草地域集会施設運営協議会主催

講演 「21世紀東アジアを中心とした漢字文化」

講師：横浜国立大学教育人間科学部教授

村田 忠禧氏

（同協議会ホームページ掲載の講演概要）

平成19年3月25日、井草地域区民センターにおいて、井草地域集会施設運営協議会の主催する講演会「21世紀東アジアを中心とした漢字文化」が、横浜国立大学教育人間科学部教授・村田忠禧氏を講師にお迎えして開催されました。

今回の講演会では、中国伝来の文字であつて、わが国の文化の礎である漢字について、21世紀東アジアを中心とした漢字文化という視点から、多くの実例を提示しながらお話しいただき、当日会場にお集まりにな

った大勢の地域住民の皆さんは、熱心に耳を傾けていました。

：当日の村田先生のお話の概要をご紹介します。

1 漢字を巡る新しい動き

① 2000年1月、いわゆる第3水準、第4水準漢字が制定されたが、これらは現在の大半のPCでは扱うことができない。

② 2000年12月、国語審議会は表外漢字字体表を作成した。常用漢字表の外にある漢字の字体を示したものである。漢字によつては「印刷標準字体」と「簡易慣用字体」の2種類を示しているが、それらの定義の根拠は必ずしも明確でなく、混乱を招いている。

③ 2004年9月、法務省が人名用漢字488字の追加を行ったが、追加された漢字には人名用とは思えないものも含まれており、常用漢字の実質的拡大という側面がある。

④ 2007年1月、朝日新聞が「朝日字体」を廃止した。

これは前述の「表外漢字字体表」に従った結果であり、表外漢字のうちのいわゆる「朝日字体」を「康熙字典」に改めた(約900字がその対象)。

⑤ 2007年2月、漢字JIS2004に対応した日本語

フォントを搭載したWindows Vistaの販売が開始された。

これにより、このOSを用いる限り、JIS第3水準漢字を扱えるようになる。おそらく今後また字体をめぐる論議が巻き起こるのではないか。

⑥ 日本における漢字の簡略化は常用漢字までとされ、常用漢字外のものには康熙字典体に則ることが定着化する傾向にある。実際には漢字は体系的なものであり、常用か常用外かで区別することは混乱を招くだけである。

2 グローバル化の進展と漢字

① 1978年にいわゆる「J」の漢字コードが制定されたが、JISの対象外とされた中国の人名や地名が日本の新聞に日常的に登場していた。たとえば「鄧小平」の「鄧」という字。固有名詞は翻訳不可能なので、たとえ日本語では使われなくとも表現可能とする必要がある。同様なことは中国語の漢字コードにおいても言える。

たとえば「辻」、「畑」、「畠」、「堺」、「梶」などは日本語漢字(和字)であり、本来の中国語には存在しない。

② 中国との往来が頻繁になり、コンピュータの能力

が向上したため、日本の漢字として存在するにも関わらず、簡体字（1960年代に中華人民共和国で制定された簡略化された漢字）で表記する・させる傾向が生まれ、それが逆に日本の漢字表記に混乱を招いている。

3 日本と中国の漢字使用状況

① 日本語の漢字の使用状況を調査してみると、教育用漢字（1006字）で88%、第1水準漢字のうちの2951字で99%以上をカバーしうる。

② 中国語においても出現頻度の高い上位15000字で95%、第1水準漢字（3775字）で99%以上をカバーしうる。

③ 漢字は何万字もある、というのは歴史上存在したものをすべて集めた場合のことであって、現代人の漢字の使用状況で見れば中国語でも6〜7000字、日本語でも4000字程度でほとんどカバーしうる。これは人間の頭脳の処理能力と関係があると思われる。

④ 日本語の漢字音は一つの漢字でも音・訓があり、音にも呉音、漢音、唐宋音があったりしてとても複雑である。中国語の漢字の発音は原則として一漢字一音である。漢字学習の困難度からみると、日本と中国との間に大差はないと考えられる。

4 漢点字の有用性

一般の点字は、日本でも中国でも、発音のみを表現する。言語は音声を介して伝達されるが、抽象的な語彙の表現には文字（漢字）が必要である。

日本には川上泰一先生（故人）の発明した、漢字を表現することのできる八点式の「漢点字」がある。これはかな点字（六点式）と共存可能で、しかも漢字の特徴を巧みに取り入れた独創的な点字表記体系である。

川上先生が漢点字を発明したその発想を正しく理解すれば、中国語でも漢字を表現する点字を創出することは、十分に可能である。

もし、漢字を表現できる中国語の点字体系ができれば、香港でも、台北でも、上海でも、北京でも、発音に関係なく、通じ合える。

5 21世紀における漢字文化のあり方

① 漢字の問題を「国語」の世界に閉じこめてはならない。

漢字は、漢語（中国語）だけでなく、日本語、朝鮮語など、東アジアで文字として採用されている。漢字

の問題をそれぞれの「国語」の世界に閉じこめ、「国語」の問題として論ずるのは不十分である。

②漢字の互換性を確保することが大切である。言語によって漢字の用法、発音、表記などは必ずしも一致しない。大切なことは互換性の確保であり、その観点から東アジアの漢字使用状況を調査・分析する必要がある。

③形にこだわりすぎてはいけない。

文字はそれぞれ字形を持つ。異体字や誤字は排除し、標準字形を明確にする必要がある。

字形は、本来、体系的であるからこそ、覚えやすく、使いやすい。

言語によって字形が異なるのは当面はやむを得ないが、不必要な差異はなくしていくほうがよい。

④東アジアの漢字文化についての共同研究が必要である。

漢字を文字として使用している東アジアの各国言語は、漢字の問題を共同して調査・研究し、漢字文化の現代社会での役割、とりわけ、高度情報化社会におけるその積極的活用について説明していく必要がある。

そのためには、正確に現実を把握する、より大規模で、広範な分野に及んだ実態調査が必要である。

⑤形にとらわれない思考が大切である。日本における漢字論議の大半は、形にとらわれすぎていて、生産的でない。

中国でも日本でも、漢字の問題を「国語」の問題としてしか見ていない。

日本で発明された漢点字は、漢字の特色をよくとらえている。形にとらわれないことで共通点を見つけ出す

漢点字

漢点字の特徴

- 従来の6点カナ点字体系を生かしつつ漢字に対応した部首構成
- 漢点字符号として従来のカナ点字の1の点の上に0の点を、もう一方の4の点の上に7の点をそれぞれ付加した8点法

ぎ 木 林 め 目 相

必要がある。漢点字の考えを東アジアに普及することがまず大切ではなからうか。

その過程で、共通するものが見えてくるであろう。

(完)

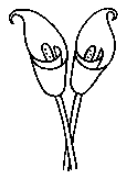
くわしくは、日本漢点字協会のホームページをご覧ください。

<http://kantenji.jp/>

「東京漢点字羽化の会」

第19、20回例会報告並びに

第3、4回「学習会報告」とわたくしごと



木村 多恵子

第19回例会、2007年6月13日（水、昼）

13…30～15…30

6月の「学習会」に新しくアイメイトと一緒に参加してくださるといふ申し込みがあったので、大歓迎でアイメイトについて少し説明をした。そして、駅までのお出迎えをしていただく方も決めた。また、プラザに入る前に、アイメイトに小用をさせてもよさそうな場所も確認しておいた。

6冊目の漢点字入力の本についての約束事を検討した。これは学習者にとつても、よい本だと思おうので楽しみである。

2冊目のテキストも入力をお願いした。これは原本をお配りするだけで、それぞれお持ち帰りいただきたい、入力方法についての疑問点は、来月の例会で出されると思う。

定時の例会が終わってから、お二人の会員が、前回

の「学習会」を休まれた方と、新しく参加してくださる方のために、レーズライターでの資料作りをしてくださった。そして、そのとき、「学習会」の前に、岡田さんに、レーズライターで書く文字を、先に伝えていただいて、例会のときに準備をしておいてはどうか、との提案があった。それに対して、岡田さんは、6月の「学習会」には間に合わないの、前回と同じ方法で進め、7月の会からはその方法を検討しましょう、ということになった。

待望のロッカーを借りることができた。これで、少しばかり資料をヒューマンプラザに預けて来られるので、岡田さんの往復の荷物が、やや楽になりそうである。もちろん、貴重品は禁物である。

第3回「学習会」

2007年6月16日（土、夜）18…30～20…30

アイメイトと同伴でご参加予定の方は、あいにく、当日健康状態が優れないとのことで、今回は欠席させて欲しいと連絡があった。ただ、来月（7月）には出席されると言っておられた。

まず、自己紹介をし、前2回の復習から始めた。

貝の文字についての話をしているとき、岡田さんが、「蛭しじみや蛤はまぐり、榮螺さざなみなど、貝類には、この貝の字

は使わないで、虫偏を使います。昔は、生き物は、人と獣と鳥と花と虫だけだと考えていて、蛙や蛇も、クラゲも、甲殻類も、皆虫にしてみました」と言った。

確かに平安時代のものを読むと蛙を虫だと書いているのを見たし、国文学の先生もそんな説明をしていた。

では、この貝の文字はどう使うか。それは、貨幣、財産に関する言葉に使われる。子安貝が、宝^{たからがい}貝の総称であるところから、財産と考えたのだろうか？子安貝は「竹取物語」の中では貴重品扱いになっている。また、アコヤ貝は真珠貝とも言われ、貝の中で、真珠の核が作られ、美しい真珠が取れることから、これも宝だと考えたのであろう。確か、これらの貝はそのままで、桜貝のように、あまり見た目に美しいものではないように聞いた覚えがある。しかし、いろいろな貝を磨いて、調度品の装飾に螺鈿という技法で、青貝や白蝶貝などを使っていることから考え合わせ、貨幣価値と見たことも考えられる。何れにしる、これも中国から伝わったことなので、わたしなどに分かるわけではない。(木村の脱線)

レーザーライターで書かれた文字

糸、系、比、数、家、宿、学、言、語、頁、貝
漢字を構成するパーツとして、ウ冠、ワ冠、ツ

プラス、ワ冠、ノ・ツ、プラス、ワ冠などがあること、そして、実際にこれらも書いていただいて説明した。

6月の例会のとき、会員から、レーザーライターで書く文字を予め岡田さんに決めていただいて、皆で書いておき、「学習会」の場で文字を書いている時間を省いてはどうか、との意見が出されたが、今回はその場で書いていただいた。羽化の会員の方々が書いてくださったっている間の、岡田さんの話もおもしろいので、木村としては、この時間も捨てがたい気がするが、いろいろ試みるのはよいと思う。

第20回例会、2007年7月11日(水、夜)

18…30、20…30

「学習会」で使うレーザーライターでの漢字の書き方について打ち合わせをした。用紙を横長に置いて、ファイルに綴じ込むスペース2センチプラス漢点字シールの幅約2センチ、計4センチを開けて、横書きで4文字、2行を原則(1枚に8文字)とする。

漢字のパーツに当たる文字があるとき、たとえば、「草」を上の方に書き、その下に「草冠」を書く。

また、漢字の元の字に近い文字(近似文字)があるときは、上の行に元の漢字を書き、下の行に近似文字

を書いていただくことにした。たとえば、「頁」を上
の行に書き、その下の行に「首」を書く。同じように
上の行に「貝」を、その下に「貝」の近似文字「具」
を書く。実際にはまだまだ皆さんのご意見を伺って決
めてゆきたい。

6冊目の本やテキストの入力方法についての話し合
いは、いつものように丁寧に行われた。

「羽化」62号をお配りした。

夜の会は、やはり時間が足りない。

第4回「学習会」、2007年7月21日（土、夜）

18:30～20:30、第一会議室

前回来られなかったアイメイト同伴者を含めて、お
二人の新しい受講者が加わり、改めてこれまでの学習
内容の総復習をした。大急ぎで前3回分を行ったの
で、岡田さんも大変だが、新しい方々はもつと大変。
そして4回とも完全出席の方々には少しもうしわけな
い気はしたが、さすがに、岡田さんの話の要点は何時
もはずさず、枝葉を広げて説明をした。

皆さんは、いわゆる途中失明で、漢字の大まかほご
存じなので、岡田さんの話しも充分ご理解いただけ
と思う。

* 予告

8月の例会（第21回）2007年8月8日（水、昼）

13:30～15:30、7階竹芝小記念ホール

第5回「学習会」2007年8月18日（土、夜）

18:30～20:30、ヒューマンプラザ7階第一会議室

9月の例会（第22回）2007年9月12日（水、昼）

13:30～15:30、7階第二会議室

第6回「学習会」2007年9月22日（土、夜）

18:30～20:30、7階第一会議室

わたくしごと

「お母さんは生まれたばかりの赤ちゃんをだっ
こしています。ゆっくり、やさしく、あやしてい
ます。ゆらーり、ゆらーり、ゆらーり。そし
て、赤ちゃんをだっこしながら、お母さんは唄い
出します。

アイ・ラヴ・ユー、いつまでも

アイ・ラヴ・ユー、どんなときも、

わたしが生きているかぎり、
あなたはずっと、わたしの、あかちゃん」

こんな書き出しではじまるのは、ロバート・マンチ
作、乃木りか訳の、『“Love you forever”』と言う、

アメリカの絵本である。この本は、子供を育てる限り
ない喜びと、日々の生活の中での苦勞と、命の引き継
ぎの神秘と喜びが、見事に描かれている。

赤ちゃんの成長の過程で、2歳では、本棚の本を全
部放りだし、お母さんの時計をトイレに流すいたずら
をはじめ。後かたづけをしなごら、お母さんは、と
きどき、「この子のせいで気が狂いそう」と叫びなが
らも、夜、赤ちゃんが寝てしまうと、その子を抱い
て、冒頭の歌を唄う。

9歳になった男の子は、お風呂は嫌い、訪ねて来る
おばあちゃんに憎まれ口を聞く。ときどき、「こんな
子、動物園にでも売っちゃいたい」と思うお母さん。
でも、夜になると、そつと子供の部屋に入り、静かに
子供を抱いて、「アイ・ラヴ・ユー、いつまでも」と
唄う。

ティーンエイジャーになった少年は、変な友達を作
り、変な服を着、やかましい音楽を聞いている。お母
さんは、「まるで、動物園にいるみたいだ」と思う。
けれども、やはり夜になり、少年が寝静まると、お母
さんは、子供の部屋のドアを開け、そおつとベッドに
近づき、ぐつすり眠っているのを確かめて、大きくな
った子供を抱いて、

「アイ・ラヴ・ユー、どんなときも」と唄う。

やがて、息子は大人になって、隣町に住むようにな

る。それでもお母さんは、あたりが真つ暗になると、
ときどき、車に乗って、息子の家に行き、明かりが全
て消えていたら、息子の寢室の窓から入り、ベッドに
近寄り、

「アイ・ラヴ・ユー、いつまでも、

アイ・ラヴ・ユー、どんなときも

わたしが生きているかぎり、

あなたはずっと、わたしの赤ちゃん」

と唄う。

お母さんは年を取り、ある日、息子に「逢いに来て
ちようだい、病気なの」と電話をする。息子が逢いに
行き、お母さんの部屋に入ろうとすると、お母さんは
歌を歌おうとしている。

「アイ・ラヴ・ユー、いつまでも、

アイ・ラヴ・ユー、どんなときも」

でも、その先を歌うことができない。息子は、お母さ
んの部屋に入り、お母さんを抱いて、ゆらゆら、ゆら
ゆら、ゆらゆら。息子は唄う。

「アイ・ラヴ・ユー、どんなときも

ぼくが生きているかぎり、

あなたはずっと、ぼくのお母さん」

その夜、自分の家に帰った息子は、二階に上がり、
暫く部屋の前で立ち止まり、それから、部屋に入り、
生まれたばかりの赤ちゃんをだっこして、ゆっくり、

やさしく、あやす。ゆらーり、ゆらーり、ゆらーり。
そして唄いだす。

「アイ・ラヴ・ユー、どんなときも、
ぼくが、生きているかぎり、
おまえはずっと、ぼくの赤ちゃん」。

これは、乃木りか訳を、わたしが乱暴なまでに省略してしまつたが、おおよその筋はわかつていただけれると思う。できるなら、文章だけでも、ここに写したいところだが、著者たちに、許していただきたい。

わたしが最初にこの本を読んだとき、ページのはじめは少しほほえみながら、次のページでは、お母さんは大変だな、と思い、子供が成長する度にケラケラ笑い、息子が母に感謝と尊敬を込めて、病床を見舞うときの涙、そして、娘（これはわたしの勝手な推測であるが）を抱くときの、命の受け継ぎの喜びが胸に染み込んだ。

このストーリーを味わっているとき、「あれ!？」と、なにか気になるものがあつた。何だろう。そっくり同じではないけれど、どこか共通している何か。そう、シチュエーションも時代も、所もまるで異なるのだが、母親が、一人息子に「あらざらん、この世の他の思い出」に「逢いたい」と歌を送る。それに対して、息子から、返歌を送る。まるで、相聞歌のように

あつた。あれは確か「伊勢物語」とは気づいたものの、さて、どの段であつたかは、どうしても思い出せない。それが、今度のテキストで、偶然引用されたのである。「伊勢物語」八四段であつた。これは短いので、引用させていただく。

むかし、をとこありけり。身はいやしなながら、
母なむ宮なりける。その母、長岡といふ所に住み
たまひけり。子は京に宮仕へしければ、参うづと
しけれど、しばしばえ参うでず。ひとつ子にさへ
ありければ、いとかなしうしたまひけり。十二月はす
ばかりに、とみのこととて、御文のみあり。

老いぬればさらぬ別れのありといへばいよいよ見
まくほしき君かな

かの子、いたううち泣きてよめる。

世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もといのる
人の子のため

宮仕えに急がしかつた「をとこ」は、長岡に住む母
のもとを尋ねる機会がなかなか作れなかつた。

一人子であつたので、母はその子をいたく可愛がつ
ていた。母から手紙があり、その中に、自分も今は避
けられぬ死を真近とする身になり、あなたにぜひ逢い
たい、との意の歌があつた。子は、つまり「をとこ」

は、いつまでも生きてほしいと願う私という子供のためにも母の身に避けられぬ死などというものがなければいいのに、と泣きながら返歌をした、というのである。

『“Love you forever”』は、1997年の発表である。原書でも“mama”ではなく、“mother”と書かれている。絵は、日本のものと、アメリカのものとは、かなり違い、邦訳のものは、淡いトーンで、絵そのものも優しいという。原画は、一瞬「や、これはグロテスクだ」と思った、と説明してくれた人が、素直な感想を伝えてくれた。息子の居る町に車で行くにも、梯子を担いでいるという。邦訳ものは岩崎書店なので、色使いも優しく、息子の家の窓のところでは、確か夜空の星が美しく描かれているという。

表現方法は大変違うとはいえ、親が子を思う気持ち、は、千年以上前も、現代も、洋の東西、本質は変わらないと思う。

わたしには子供はいないけれど、いまわの際に、思いを託したい人はいる。それは、必ずしも肉親にかぎらなくても、「愛を注ぎ続けたい」人がいることの幸せを思う。わたしが、この絵本を探したのも、いつてみれば、その延長である。

「報告と」案内

一 漢点字講習会、台風でお休み

横浜での漢点字講習会は、隔月に開催して参りましたが、五年目にして初めてお休みすることになりました。

台風第四号の接近に伴い、七月一五日に予定していた講習会は、直前に中止の止む無きと判断しました。

幸いにしてこれまで一度もこのようなことはございません。九月からは予定通り行えるよう祈念しております。

二 東京での漢点字の学習会

木村さんのご報告にもありますように、東京では毎月第三土曜日の夜に、港区のヒューマンプラザの一室をお借りして開催しております。

横浜で行っている四年間の学習会の経験が、大変役だっております。

これだけでは横浜の受講者の皆さんには、テストケースをご提供いただいて（裏表紙31ページに続く）

2007年8月3日

漢文のページ

臨_ム 洞_ニ 庭_ニ

盛唐 孟浩然

八_ノ 月_ノ 湖_ノ 水_ノ 平_{ナリ}
 涵_{シテ} 虚_ヲ 混_ズ 太_ニ 清_ニ
 氣_ハ 蒸_ス 雲_ノ 夢_ノ 澤_ノ
 波_ハ 撼_{カス} 岳_ノ 陽_ノ 城_ノ
 欲_{スル} 濟_ニ 無_シ 舟_ノ 楫_ノ
 端_ニ 居_{シテ} 恥_ツ 聖_ニ 明_ニ
 坐_{ロニ} 觀_テ 垂_ル 釣_ヲ 者_ヲ
 徒_{ラニ} 有_リ 羨_ム 魚_ヲ 情_ニ

洞庭に臨む

盛唐 孟浩然

八月湖水平かなり

虚を涵して太清に混ず

気は蒸す雲夢の沢

波は撼かす岳陽城

濟らんと欲するに舟楫無し

端居して聖明に恥ず

坐るに釣を垂るる者を観て

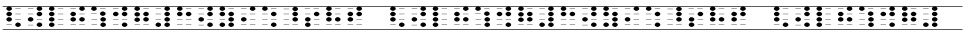
徒らに魚を羨むの情有り



丞相の張九齡に贈ったとされる五言律詩。

前半で、旧暦八月の洞庭湖の雄大な眺望を描く。後半では、手だてもなく、何もせずにいることを恥じながらも、釣り人を見ると自分も魚がほしい（仕官したい）気持ちが起こってくる、と暗に役人に推挙されることを望んでいる。

涵_{シテ} 虚_ハ 空_ニ 湖_ノ 水_ノ が 大_ニ 空_ノ を ひ_キ た_シ て_イ る_。
 天_ノ 揚_子 雲_夢 澤_{（うんぼうのたく）} 洞_庭 湖_。
 付_近 の 揚_子 江_沿 岸_ニ あ_る 大_ニ 湿_地 帯_ノ の 名_。
 岳_陽 城_ノ の 名_。 城_ハ 町_。
 閑_居 に 同_ジ 天_子 の 何_モ せ_ず に_イ る_。 恩_德 。



臨 ム 洞 庭 ニ

盛 唐 孟 浩 然 もうこうねん

八 月 湖 水 平 カナリ

涵 シテ 虚 フ 混 ズ 太 清

ニ

氣 ハ 蒸 ス 雲 夢 ノ 澤

波 ハ 撼 カス 岳 陽 城

欲 スルニ 濟 ラント 無 シ 舟

楫

端 居 シテ 恥 ズ 聖 明 ニ

坐 ロニ 観 テ 垂 ルル 釣 フ

者 フ

徒 ラニ 有 リ 羨 ムノ 魚 フ 情

参考図書：遠藤哲夫『語法詳解 漢詩』（旺文社）



孟浩然(689~740年)

盛唐の詩人。自然をよむのにすぐれ、王維とあわせて、「王孟」と並び称せられる。五言絶句「春暁」が有名。官職には恵まれなかった。

漢点字講習用テキスト

初級編 第四回（全十回）

本稿は点字符号の引用が多いため、見やすさを考慮して横書きで表示しています。

2 基本文字（2）

（42） 耳^{⠠⠠⠠} ジ みみ

身体のみみを象った文字です。部首では〈耳偏〉として、耳に関わること、ものを聞くことを表します。

「^{⠠⠠⠠}」 「^{⠠⠠⠠}東風」 「^{⠠⠠}鼻科」 「^{⠠⠠⠠}問」

（43） 車^{⠠⠠} シャ くるま

荷車を象った文字です。多く〈車偏〉として、運送、交通、軍事などの意味を表します。

「^{⠠⠠}両」 「^{⠠⠠⠠}」 「^{⠠⠠⠠⠠}」 「荷^{⠠⠠}」 「^{⠠⠠}押し^{⠠⠠}」

（44） 門^{⠠⠠} モン かど

建物や敷地の正面にある出入り口、開閉できる扉の付いたモンを象った文字です。部首では〈門構え〉として、何かの入り口、境界の出入りを監視する場所の意味などを表します。

「正^{⠠⠠}」 「裏^{⠠⠠}」 「赤^{⠠⠠}」 「関^{⠠⠠}」 「登竜^{⠠⠠}」 「^{⠠⠠}口」 「^{⠠⠠}付け」

（45） 病^{⠠⠠} ビョウ ヘイ や - む やまい

人の生にとって避けて通れないのが病気です。病気と闘いながら一生を送ると言っても過言ではありません。この字は、墨字では「病垂」に「丙」の形ですが、人が病気にかかって、身体が硬くなって、床に横たわっている姿を表していると言われます。〈病垂〉は、病気や病魔を意味します。漢点字では「^{⠠⠠}」の形でその〈病垂〉を表します。

「^{⠠⠠}氣」 「^{⠠⠠}魔」 「成^{⠠⠠}」 「生活習慣^{⠠⠠}」 「^{⠠⠠}み衰える」 「恋の^{⠠⠠}」

(46) 行 ☺ コウ ギョウ アン ゆ - く
おこな - う

道の交差し行き交う形を象った文字です。道の交わったところには、人の行き交いも活発になって、市が立ち、町が発達します。「行」の字には、そのような意味が含まれて、活発な運動を表します。部首では〈行人偏〉として、〈行構え〉として、広く人の行動や社会のたたずまいの意味を表します。漢点字でも、「☺☺」の形で、〈行人偏〉〈行構え〉を表します。

「☺為」「☺動☺」「☺政」「☺☺を☺☺する」「☺灯」「☺脚」
「☺いを慎む」「☺☺知れず」

(47) 店 ☺ テン みせ たな

一戸を構えて商品を商う家です。墨字では、「広垂れ」の下に「占」の形で、屋根と壁を持った建物で商いをするを意味します。漢点字では、「☺☺」の形で、〈広垂れ〉を表します。

「☺舗」「☺主」「☺員」「☺先」「☺賃」

(48) 月 ☺☺ ゲツ ガツ つき

夜、空に上って地上を照らすお月様です。その三日月を象っています。夜を照らす淡い光、約一ヶ月で満ち欠けを繰り返します。その意味で、天体としての月ばかりでなく、時間の単位としても、大きな意味を持っています。

「☺☺☺ (睦☺)、☺☺☺ (如☺)、☺☺☺ (卯☺)」「満☺」「☺☺日☺」
「☺☺☺」

(49) 肉 ☺ ニク

身体を作っているニク、食物でもあるニクを象った文字です。部首では〈肉月〉として、身体や食物に関わる意味を表します。漢点字でも「☺☺」の形で、〈肉月〉を表します。

「☺体」「☺親」「筋☺」「骨☺」「弱☺強☺」

(50) 分 ☺☺ ブン フン ブ わ - ける
わ - かる わ - かつ

墨字では「八頭」の下に「刀」の形で、刀で肉を切り分ける様子を象

っています。「フン」と読んで、時間や角度の単位を、「ブ」と読んで、貨幣や長さや重さの単位を表し、そしてものを分けること、ものごとをよく分けて理解することなどを表しています。漢点字では「𠄎𠄎」の形で、〈八頭〉や三角の屋根を表します。

「𠄎離」「𠄎解」「𠄎𠄎」「𠄎𠄎𠄎の𠄎𠄎」「𠄎𠄎等𠄎」「𠄎𠄎時𠄎𠄎𠄎𠄎」
「𠄎別」「𠄎かりました」

(51) 日𠄎 ジツ ニチ ひ

太陽・おひさまを象った文字です。日の出没を一日として、時間の単位を表します。部首になって、ひかり、暖かさ、自然の恵みを表す文字を作ります。水と大地とこの太陽が、太古から人々の生の拠り所だったのでした。それは、現在も変わりありません。

「𠄎光」「𠄎𠄎𠄎𠄎」「𠄎𠄎𠄎𠄎」「𠄎𠄎𠄎𠄎」「休𠄎」「𠄎曜𠄎」「𠄎の𠄎𠄎」

(52) 性𠄎𠄎 セイ ショウ さが

墨字では「立心偏」に「生」の形で、ものの性質や性格を表す文字です。〈立心偏〉は「心」の字形が変化したもので、心の状態や動きを表す部首です。また、男女の「セイ」も表します。漢点字では「𠄎𠄎」を、〈立心偏〉として用います。

「𠄎質」「𠄎格」「𠄎別」「𠄎𠄎」「男𠄎」「個𠄎」

(53) 心𠄎 シン ころ

胸の奥にある心臓を象った文字です。ものの真ん中、ものの本質という意味を持っています。部首では多く〈下心〉として、心に秘めること、思うことを表します。漢点字では「𠄎𠄎」の形で表されます。

「𠄎臓」「中𠄎」「熱𠄎」「𠄎理𠄎」「𠄎許ない」「𠄎掛け」

(54) 口𠄎𠄎 コウ ク くち

人のクチを象った文字です。人の口ばかりでなく、あらゆるものの入り口・出口、開いた部分を表します。部首としては、大変多く使われています。

「𠄎𠄎」「銀𠄎𠄎座」「𠄎述」「入り𠄎」「出𠄎」「𠄎𠄎」

(55) 𠄎𠄎 イ かこ - う かこ - む かこみ

墨字では「井」の字を四角く囲った形です。周囲を囲って守ることを

意味します。周りの四角い枠は〈国構え〉と呼ばれます。漢点字では「𠄎𠄎𠄎」の形で、〈国構え〉を表します。

「周𠄎𠄎」「範𠄎𠄎」「板𠄎𠄎い」「𠄎𠄎い込む」

(56) 十𠄎𠄎 ジュウ とお

(漢数字の項、参照)

(57) 止𠄎 シ と-める と-まる

とど-める とど-まる や-む や-める

足を止める形を象った文字です。動いていたものがとまる・とめるという意味があります。

「停𠄎𠄎」「防𠄎𠄎」「𠄎𠄎血劑」「𠄎𠄎𠄎堤」「𠄎𠄎め𠄎𠄎」「𠄎𠄎𠄎め」

.....

近似文字

(1) 必𠄎𠄎𠄎 ヒツ かなら-ず

「心𠄎𠄎」の近似文字です。墨字では「心」の字に、右上から左下へ線が斜めに交差した形です。

「𠄎𠄎𠄎然𠄎𠄎」「𠄎𠄎𠄎死」「𠄎𠄎𠄎着」「𠄎𠄎𠄎ずしも…ない」

(2) 才𠄎𠄎𠄎 サイ わず-かに

「十𠄎𠄎」の近似文字です。「十」の字に、右上から左下へ斜めに線が入ります。持ち前のの意味があります。年齢を数えるサイにも用いられます。

「𠄎𠄎𠄎能」「天𠄎𠄎𠄎」「秀𠄎𠄎𠄎」「𠄎𠄎𠄎覺」「英𠄎𠄎𠄎教育」

(3) 正𠄎𠄎𠄎 セイ ショウ

ただ-しい まさ-に

「止𠄎𠄎」の近似文字です。例外的に「𠄎𠄎𠄎」の形を採りました。漢点字の創案者の川上先生は、「正」の五つの画を漢点字で表したかったとおっしゃっておられました。墨字では「止」の上に「一」を乗せた形をしています。真っ直ぐな線に向かって足を止める、真っ直ぐに向き合う、正面から向き合うという意味があります。

「𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎」「𠄎𠄎𠄎直」「𠄎𠄎𠄎𠄎」「𠄎𠄎𠄎𠄎形」「𠄎𠄎𠄎の𠄎𠄎と負の𠄎𠄎」

(24ページから続く) いるように思われますが、必ず
フイードバックできることをお約束致します。大変意
義深い学習会になっております。

三 放送大学の印刷教材

今年度から東京の木村多恵子さんが、放送大学を受
講しておられます。

何時からこのようなサービスがなされるようになって
たかは詳らかにしませんが、印刷教材の電子データ
を、テキスト・データとしてご提供いただけるようにな
っております。

東京漢点字羽化の会ではそのデータを、漢点字書の
レイアウトに整えたり、JISコードにない文字を補
ったりという作業から着手しております。

国文の勉強は、文字情報がしっかりしていなければ
なりません。原文からの入力という一つのステップを
省略できることは大変画期的なことではありますが、
それだけに作業の多くが「点検」ということになりま
す。その点では楽になったとばかりは言えません。

これを機会に、多くの漢点字使用者に、放送大学
で、とりわけ国文系の勉強を試みていただけることを
願って止みません。

編集後記

▼七月の梅雨はだ
だらと長引き、な
かなか明けませ
んでした。八月
にはいって一
気には本格的な
夏がやってきま
した。あちこち
で水の事故が
報告されていま
す。是非お気を
つけください。
▼この間、急に
プリンターが故
障してしまいました。もう何年か使った
ものだし、最近
は性能がよくな
って安くなっ
ているからと、
パソコンショップ
に
出かけて新しい
プリンターに買
い替えました。
オールインワン
という、スキャ
ナーもコピーも
OKというもので
、インクも黒は
水に濡れても大
丈夫という顔料
インクを使っ
ています。▼実
際に使ってみ
て、本当にその
使い勝手の良さ
に驚いています
。このキヤノン
製のプリンター
インクは、安い
詰め替え用も出
回っております
。安心して大量
プリントができ
ます。何しろ、
一枚あたりの単
価がコピーより
大幅に安くなり
、できればえも
なかなかのもの
で、嬉しくなり
ました。(木下 和久)

E-MAIL (岡田健嗣) : eib_okada@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://ukanokai.web.infoseek.co.jp>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は10月15日です。

※本誌(活字版・テープ版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。